

「教育の時代」を考える

中内 敏夫

十数年まえのことである。そのころ「第三の教育改革」とよばれた教育の総合的な改革案が発表され、

「高度学歴社会」などといったことはやはりはじめていたころのことである。ある町の母親たちの小さなサークルによばれていった。「改革」とか「答申」とかいつているが、よくわからないので、専門家の頭でまとめて教えてほしいということだった。けっこうずくめというわけにはいくまいといった意味のことをはなしたと思う。三、四の質問があったが、ひとつ印象に残ったのが、農家で苦勞してきたらしい老年の母親の感想である。

わたしたちの時代には、今日は手伝いはいいから学校（小学校）へいけといわれただけで、おどりがあがるほどありがたかったもんだ。それがなんと、小学校で、さらに三年も学校にいける時代になったんだから、中味は少々やすものでも有難く思わなくちゃ——というのである。

「有難く」思わなければならない状況は、そのご、さらにすすんだのだった。ゆりかごから墓場までということばがあるが、ゆりかごからどころではない。生れたとたん、いや、おそらくはそれ以前から、日本の子どもは、「教育」的環境にとりこまれて、誕生し、育

つ。としとればとしとつたで、公的生活からは引退しても、生涯教育とかで「教育」生活からの引退はない時代である。ゆりかご以前から墓地直前までの「教育」時代で、児童労働からはじまる一生働きづくめの時代と比べると、「有難い」こともかもしれない。

やすものであれ九年間も労働を離れて学校にいけるだけで有難い話という考え方は、おそらく、今日なお多くの人びとの意識ではないだろうか。総理府の「教育に関する世論調査」によると、八〇パーセントもの親が、わが子の教育はうまくいっていると考えているそうである。しかし、わたくしは、この、やすものでも結構という論法に、こだわるものを感じる。わたくしたちの時代をおおっているこの「教育」時代の「教育」は、かこくで、人間を破壊しつづけた、かつての寄生地主制下の資本主義的賃労働からの救いとして、それに対置されていた教育と同質のものだろうか。その、おそらくは観念のうえだけのものであったよう

こぼしき教育の世界と同質のものなのだろうか。むしろ逆で、その労働と同質のものではないか。

よりよく教育された人格、よりできる子どもをめざして、わたくしたちは、毎日努力している。わたくしも、教師のひとりとしてつねに、たゆむことなく、そうありたいとねがっている。ひとりの親としても、そうありつづけたいと願っている。教材つくりを頭をなやまし、指導過程について仲間と相談をする。

しかし、わたくしは、こうした教育方法上の問題に頭をなやます教師であるとともに、そうやって自分が工夫をこらしている教育とはそもそもなものであるかに、心をつかう人間でもありたいと願っている。

(お茶の水女子大学)